

平成二十五年 六月三〇日発行
三重大学 日本語学文学第二四号 抜刷

『萬葉集』卷第十九卷末歌群考

— 「春愁三首」に非ず —

廣岡義隆

『萬葉集』卷第十九卷末歌群考

—「春愁三首」に非ず—

廣岡義隆

○キーワード＝卷末八首・早春譜曲四首・晚春歌曲四首・景物・

家持歌の空白

一、はじめに —掲載の経緯—

当稿は二〇〇一年三月一日の美夫君志会三月例会で「卷十九の卷末歌群—「春愁三首」に非ず—」として発表した内容である。B四プリント七枚に打ち出したものではあったが、十数年前のものになる。

畏兄村瀬憲夫氏は、昨年（二〇二二年）七月一日に開催された美夫君志会全国大会の発表「万葉集末四巻の編纂—構想論・構造論・家持論¹⁾」において、右の口頭発表を資料として引くと共に、「是非活字にしてほしい」との発言があった。また、二〇一三年一月一三日に開催された「萬葉集の編纂と成立を考える会」一月例会での村瀬憲夫氏の発表「大伴家持春愁三首歌と詩経」の中においても、この十数年前の発表についての言及があった。学と情に篤い村瀬憲夫氏に、頭の上がらぬ思いで我が方寸

は溢れる。

ここに、その後の研究成果には敢えて触れず、時を口頭発表の二〇〇一年三月一日に固定する形で、その内容の概要を記録する。プリント内容そのものはその時点における先行研究を詳しく記していたが、多くは省略し、眼目・大要を中心に録する形をとる。この点、諒とされたい。歌群研究史の概要は小野寛氏の「春愁絶唱三首の読みの現在²⁾」で縦覧できる。このことも、当初の発表プリントにおいて言及していたところである。該当の卷第十九の卷末歌群八首をここに引く。

十一日 大雪落積 尺有二寸 因述拙懷歌三首

大宮能 内尔毛外尔母 米都良之久 布礼留大雪 莫踏祢乎之 (19・四二八五)

御苑布能 竹林尔 鶯波 之波奈吉尔之乎 雪波布利都々 (19・四二八六)

鶯能 鳴之可伎都尔 尔保敝理之 梅此雪尔 宇都呂布良牟可 (19・四二八七)

十二日 侍於内裏 聞千鳥喧 作歌一首

河渚尔母 雪波布礼々之 宮裏 智杼利鳴良之 為牟等已

呂奈美 (19・四二八八)

二月十九日 於左大臣橘家宴 見攀折柳條歌一首

青柳乃 保都枝与治等理 可豆良久波 君之屋戸尔之 千

年保久等曾 (19・四二八九)

廿三日 依興作歌二首

春野尔 霞多奈毗伎 宇良悲 許能暮影尔 鬻奈久母

和我屋度能 伊佐左村竹 布久風能 於等能可蘓氣伎 許

能由布敝可母 (19・四二九〇)

廿五日 作歌一首

宇良宇尔尔 照流春日尔 比婆理安我里 情悲毛 比登里

志於母倍婆 (19・四二九二)

春日遲々 鶴鷗正啼 悽惻之意 非歌難撥 耳 仍作此

歌 式展締緒

但此卷中 不稱作者名字 徒録年月所處縁起者 皆大伴

宿祢家持 裁作歌詞 也

二、家持詠の歌数の推移

まずは、『萬葉集』卷第十九における大伴家持の詠作歌について、確認しておく。家持は、卷第十九の卷末記(上に記した

四二九二番歌の左注の次条)では、卷第十九において作者の「名字」を録していないのは自身の作品であると明言していることと分るように、自身の作にこだわっている。その家持作歌について、年月次を追う形で、その詠作数(作品数)を見てゆく。

天平勝宝三年(七五〇)

正月 短2 (宴歌)

二月 短1 (旅宿での詠歌)

――*――*――*――*――

三月 短23 長6 反9 以下、卷第十九

四月 短8 長7 反11 A

五月 短3 長2 反3

六月 短1 (見芽子早花)

七月 0 ……「0」は家持の詠作作品

八月 0 が無いことを意味する。

九月 短1 (宴歌)

十月 短1 (宴歌)

十一月 0

十二月 短1 (雪日作歌)

天平勝宝三年(七五一)

正月 短3 (宴歌)

二月 短1 (宴歌)

三月 0

四月 短1 (詠霍公鳥歌)

五月	0
六月	0
七月	0
八月	短6長1反1 (遷任上京に関わる歌々)
九月	0
十月	短1 (宴歌)
十一月	0
十二月	0

天平勝宝四年 (七五二)

正月	0
二月	0
三月	0
閏三月	長1反1 (儲作歌)
四月	0
五月	0
六月	0
七月	0
八月	0
九月	0
十月	0
十一月	短3 (宴歌)
十二月	0

天平勝宝五年 (七五三)

正月	短4
二月	短4
三月	0
四月	0
五月	0
六月	0
七月	0
八月	短1 (宴歌)
九月	0
十月	0
十一月	0
十二月	0

以下、卷第廿

右で明らかかなことは、卷第十九の巻頭歌群(これをAとする)と卷第十九の巻末歌群(これをBとする)を別とすると、家持の作品は極めて少なく、しかも宴やそれに関わる歌(儲作歌)が多く、作者の内発的な詠作歌は天平勝宝二年六月の「見芽子早花」(19・四二一九)、同年十二月の「雪日作歌」(19・四三二六)、天平勝宝三年四月の「詠霍公鳥歌」(19・四三三九)の短歌三首に過ぎないことが指摘できる。歌群Aに関しては、天平勝宝二年の三月・四月・五月としたが、その五月の作の内「短2長1反2」は五月二十七日とそれ以降と推測され、他の「短1長1反1」(五月六日

とそれに近い日の作）からは時期が離れることになり、歌群Aを三月・四月に限定するのが良い側面がある。

北山茂夫氏は、天平勝宝五年三月から七月に及ぶ空白期間（即ち、歌群Bより後の空白）について、

この、あまりにも著名な家居独詠三首（注、四二九〇、四二九二番歌）のあと、作歌の中絶すること五カ月に及んだ。それは、これまでも家持には生じがちな、例の歌日誌のブランクである。七四四（天平一六）年の後半から翌年一杯、作はまったくなかった（すくなくとも、自他の歌を記録していない）。越中国守時代にも、元正上皇の死、あるいは聖武天皇の退位の直後に、それぞれかなり長い空白が見られた。いまのわたくしには、直接的な原因はつきとめにくいけれど、ともかく、ここにいくどめかの空白が生じた。と指摘し、また市瀬雅之氏は、天平勝宝三年十月ごろから翌四年十一月頃までの空白期間について指摘している。

三、卷第十九の卷末部について

卷第十九の巻頭歌と巻末歌、特に巻頭A歌群の中でも冒頭部の四一三九から四一五〇番歌と、巻末B歌群の中でも大尾部の四二九〇から四二九二番歌（通称「春愁三首」）との照応については、従来からよく指摘されることである。このことについて、川口常孝氏による否定的発言をここで引いておく。

卷十七の巻初は特別なものとして、他の全体を見渡してみると、おおよそとして、発端（巻初）は三月であり、終結（巻末）は正月ないし二月であるという範型が帰納できそうである。…中略…、卷十九卷末歌群は、ごく自然にあるべき位置に置かれていたのであつて、その配列は、決して意図や作為の結果ではないということである。

…上略… 対応は、巻初、巻末に位置するがゆえの対応ではなく、また、家持の代表作と見なされるものの相互照応によるそれでもない。かれのこれへの深化が美事に果たされているがゆえの対応である。

大伴家持において、卷第十九を構成するに際しての結構として、巻頭A歌群と巻末B歌群の配置は当然意図されていたに違いないが、それは巻次編集上の配置としてのものであり、それ以上のものを考えないのが良い。

ここでは、卷第十九巻末のB歌群八首について、基本的事項を見ておこう。

この八首について、まず太陽暦換算の月日を示し、その概ねの季節感を窺うしるべとしよう。

天平勝宝五年（七五三）

正月十一日……太陽暦二月	十八日……3首
十二日……太陽暦二月	十九日……1首
二月十九日……太陽暦三月二十八日……1首	
廿三日……太陽暦四月	一日……2首
廿五日……太陽暦四月	三日……1首

次に、この八首の歌に詠まれる景物とその歌の場について、縦覧すると次のようになる。

歌番号	旧暦の月日	景	物	詠作の場など
四二八五	正月十一日	大宮	内外	大宮の内・外
四二八六	正月十一日	御苑布	竹林	大宮
四二八七	正月十一日	可伎都(垣内)	鶯	大宮の(内)外
四二八八	正月十二日	宮裏	雪	内裏(宮裏)
四二八九	二月十九日	屋戸	雪	河渚 智孖利(千鳥)
四二九〇	二月廿三日	屋度	鶯	青柳
四二九一	二月廿三日	村竹	春野	霞 暮影
四二九二	二月廿五日	春日	比婆里	橘家(宴歌)
			風	春野(依興歌)
			由布敷	我宿(依興歌)
				春野(悽惻歌)

右は歌の場(下端)と歌の景物列挙に過ぎないが、これを見てわかることは、時・場と共に推移して行く景物である。場のまに、時のままに、それに抗うことなく、歌詠内容も推移している。これは当然のことであるが、押さえておく必要はある。即ち、前半四首は正月十一〜十二日の大宮の景である。題詞に「十一日、大雪落積、尺有二寸。因述拙懐歌三首」(四二八五、四二八七番歌、題詞)、「十二日、侍於内裏、聞千鳥喧、作歌一首」(四二八八番歌、題詞)とあり、一尺二寸(天平尺で三五センチほど)も積った雪により、職務上大宮に伺候しての作である。

後半四首は、月も改って二月になり(太陽暦では三月末から四月)、歌の場は橘家や家持居宅・春の野としての詠作である。前半四首から後半四首へ受け継がれる景物として竹(竹林・村竹)と鶯

(鶯)がある。受け継がれる景物よりも推移する景物が多いのは当然のことであり、留意すべきは、春の景を移りゆくままに心象として歌いあげていることである。

以下、各々の歌・題詞について、見るべき発言を拾ってゆく。四二八六〓竹と鶯との配合が、早くもここにあらはれてゐる。

(鴻巣盛廣氏『萬葉集全釈』第五冊) 四二八七〓こういう三首を家持は独りで作ったのである。

(中西進氏『大伴家持』) 右で中西進氏が「独りで作った」と指摘しているのは、別の表現で言う「宴歌」ではないということになる。

四二八八〓いずれも(注、四二八五〜八)歌の場は、内裏とその周辺である。それは、少納言という官にはふさわしい。

宴歌の場合とは異なり、家持は、のびのびと歌い、できばえもよい。かれは、これらの日に北越の積雪を想う瞬間があつたにちがいないけれど、それは作歌のモチーフにはならなかつた。鶯と千鳥は、越中でも好んで歌つた対象であつたのだが、ここでは、その背景は、あくまでも囑目の内裏における雪の景である。家持は、半年にしてすっかり宮廷の世界に没入していた。

(北山茂夫氏『大伴家持』)

四二八九Ⅱその「うぐひす」が一月十一日の歌二首(四二八六〜七)に登場する。太陽暦二月十八日頃で、「うぐひす」が鳴いたとは思えない。にもかかわらず、「うぐひす」を題材に呼びこんで幻想を描かないではいられない何かが家持にあつたらしい。翌日の一月十二日の歌に「千鳥」が現われるのも、事情の本質は同じであろう。であれば、絶唱第三首四二九二の歌に「ひばり」が登場するのも何かつながりがありそうである。…中略…。絶唱三首は、題材の点で、奇妙に家持帰京後の最初の独詠歌四首の尾を、脈々と引いているのである。こういう流れから、四二八九の賀歌を取り除きわれないのではなからうか。

(伊藤博氏『萬葉集釈注』十)

四二九〇題詞「依興」——この家持における「依興歌」については種々言及されている。ここでは、小野寛氏と藤井貞和氏の発言を引いておく。

家持の「依興歌」は共通して非現実の世界をうたう歌であ

り、家持の「興」は現実から離れて想像の世界を描こうとする心で、それは家持独自の文学を生み出す意識を示すことばであり、文学創造における想像力の存在を意識したことばだったと論じた。

(小野寛氏自身による「家持の依興歌」論についての要約)¹⁰⁾

ごく私的な、つまり自分の心のなかだけでの事件としての感興という意味である、…中略…。それらは「雑歌」であるよりはかえって反「雑歌」と見るのがよい。

(藤井貞和氏「作家論 詩人の成立」)¹²⁾

四二九〇以下の三首Ⅱ 以下の三首いづれも春愁の心を詠じたもので、家持もこゝに及んで漸くその独自の風格を示すに至つた。

(森本治吉氏担当『萬葉集総釈』第十)

三首は同じ日に作られたものではない。わずかではあつても二日のずれがあり、これを無視して一貫した作と考えることは正確ではあるまい。早い話、第一首と第二首には、「この夕影」「この夕べ」と時刻の指定がきちんと行なわれていて、これらを土台とした上で夕霞の中のうぐいす、群竹を揺する夕風が詠じられている。二首を一連と考えることは可能だろう。ところが第三首では状態がまるで違う。…中略…。二十三日の歌は景を叙べたものであるのに対して、二十五日の歌は、それにとどまらず情を述べたものだということになる。…中略…。二十五日のものは興によつて作つたのではない。あえて作つたものである。…中

略…。二十三日の依興歌の趣にかえて、わが孤独の沈思がいかに悲しいかを歌ったものであつてみれば、何物かに向かつて孤独の悲しさを歌いたかつたのが、この一首であつた。

(中西進)「絶唱三首の誤り」

右の中西氏の指摘を是とするが、私も中西論の三年半後に中西論とは別個に(中西論を知らずに)、次のように言及している。

因みに言ふ。大伴家持の短歌三首以上の連続配列詠二十一群を拾つて検討したところ、連作としての論があるものもあるが、それも吟味するとの時の推移と共に詠み流した単なる矚目詠にすぎなくて、有機的構成は指摘できない。即ち、連作詠は一も存しなくて、家持は矚目詠歌人と断じうるものである。右の二十一群中には入れてゐないが、著名な「春愁三首」も、家持は四二九〇・四二九一番歌と四二九二番歌とに分かつて連作結構を打消してゐるのである。又、二首作品であるが、一見連作かと思はれる巻十九冒頭の春苑桃李歌矚目詠(四一三九・四二四〇番歌)も、一は桃を歌ひ、一は李を歌ふのみで、その詠む内容、歌詠の世界は別箇な、単なる矚目詠にすぎないのである。連作と云ふ面からみてネガティブな家持像と云へる。

(廣岡義隆)「讃酒歌の構成について」

四二九〇〓尾崎暢映氏による次のような関連歌についての指摘がある。川口常孝氏の整理¹⁵⁾で引用する。

(イ)春の野に霞たなびき咲く花のかくなるまでに逢はぬ君かも

(巻十、一九〇二。作者未詳)

(ロ)春の日のうらがなしきにおくれ居て君に恋ひつつ現しけめ
やも

(巻十五、三七五二。狭野弟上娘子)

(ハ)わが屋戸の秋の萩咲く夕影に今も見てしか妹が光儀を

(巻八、一六三三。田村大嬢)

(ニ)梅の花散らまく惜しみわが園の竹の林に鶯鳴くも

(巻五、八二四。阿氏奥島)

四二九一〓前歌の夕暮れの微光は薄れて、作者の聴覚はいっ

そう研ぎ澄まされている。(新潮日本古典集成本『萬葉集』)

また、四二九一番歌については、四二九〇番歌同様に、尾崎暢映氏論の川口常孝氏による発展整理¹⁶⁾がある。

(イ)わが屋戸の秋の萩咲く夕影に今も見てしか妹が光儀を

(前掲の(ハ)の歌)

(ロ)梅の花散らまく惜しみわが園の竹の林に鶯鳴くも

(前掲の(ニ)の歌)

(ハ)一つ松幾代か経ぬる吹く風の声の清きは年深みかも

(巻六、一〇四二。市原王)

(ニ)椽の解濯衣のあやしくも殊に着欲しきこの夕かも

(巻七、一三二四。作者未詳)

四二九二〓(「独座」「独越」「独去」「独宿」等の『萬葉集』中の用例を挙げた上で) このようにして、ヒトリの世界は、やや形姿をあきらかにしてきた。ここでわたしたちは、さらに次の

ような問いを設けてみよう。人間には、大きく分けて、Dの世界とknowの世界とが考えられる。行為の世界と思维の世界とである。…中略…。結果は驚くべきさまを示してわたしたちのまえに提出される。家持の一例だけが思念の範囲のもので、他はすべて（作者未詳歌をも含めて）所作・所為にかかわる。家持だけが「ひとり思ふ」世界を切りひらいていたのである。…中略…。わたしたちは改めて、この著名の一首（四二九二）がもつ重みを考えてみなければならぬ。

（川口常孝氏「独」の世界¹⁸）

次に挙げる伊藤益氏の分析は、前二首と後一首が截然と分かると考察するものである。

四二九〇〜四二九一は、作者がそのただなかに存在し、しかも揺曳する作者の情を包含する景を描き出していると言えよう。これに対して、四二九二が記述する景は、作者の情はもとより、作者そのものをも疎外した作者不在の風景、すなわち「非在の構図」にほかならない。自己の情の投射や自己存在の参入を拒んで定位するその「非在の構図」に直面する家持は、自己の実存の根底を揺り動かすような不安に駆られる。その不安のなかで、「ひとりし思へば」と語るとき、彼は何を「思」っていたのか。（一九七〜八頁）
四二九二の家持が心の目を以て凝視しながら、「思ふ」ことによって、「語り」のうちにもたらそうとしたものは、在るものに関してのみ言表の能力をもつ「ことば」にとつて、本

来的に関与不能な「非在」という事態ではなかったか、と思われる。（二〇四頁）

家持の四二九二をめぐる本章の叙上の考究は、日本人がすでに古代の時点で「非在」を明瞭に自覚・認識していたことを如実に示している。…中略…。「非在」をめぐる成る日本人の知は、つねに不安という情調に貫かれたものであったと考えられる。（二〇九頁）

（伊藤益氏「非在の構図」¹⁹）

以上、当条は研究の動向を追う形になり引用が多くなったが、一般的に理解されている「春愁三首」という把握ではなくて、『萬葉集』に収められているままに、巻末の三首について、二首と一首から成ると把握する読みの存在が確認できるのである。

私は当条冒頭で指摘したように、前半四首は、正月十一〜十二日の大宮の景であり、折からの一尺二寸の積雪に大宮に馳せ参じた時の詠作として、大宮の御苑の雪景とそれに触発された景から歌が作られている。雪が前半四首の全てに出ると共に、御苑の竹、梅と鶯、また河渚と千鳥とが描出されている。

また後半四首は、月が改まって二月になってからの橘家や家持の居宅での詠作であり、春の景として展開されている。橘諸兄への賀歌にも青柳を描出し、「春」（春野・春日）の語を基軸に、霞・夕影・比婆里を描くと共に、結果的に、竹（竹林・村竹）と鶯とが前半四首と後半四首とを繋いでいる。

このように、この巻末八首を把握することが出来よう。

四、おわりに

卷十九卷末三首(四二九〇〜四二九二番歌)は多く「春愁三首」と一括して解釈されているが、二首(四二九〇〜四二九二番歌)と一首(四二九三番歌)とは日付が異なると共に、歌の情景も異なっている。このことは中西進氏によって指摘されていることを確認した。連作という面から見て、ネガティブな家持像が見えてくることについての拙論も示した。また、伊藤益氏が卷末三首を二分すべきことを指摘していた。

二月廿三日の二首(四二九〇〜四二九二番歌)はまさに「依興歌」であり、二月廿五日の一首(四二九三番歌)はその左注に言及がある「悽惻作歌」として把握理解するのが良い。四二九二番歌の左注を三首(四二九〇〜四二九二番歌)に及ぼす理解があるが、それは日付を付した題詞が拒んでおり、その解釈は無理である。左注は四二九二番歌の「語注」と理解するのがよい。曖昧に三首全体に及ぼして見る理解は作者家持の真意から外れるものである。

卷末歌群の八首全体について見ると、三寒四温の早春讃曲(四二八五〜四二八八番歌)の四首と、雲雀も鳴く晚春歌曲(四二八九〜四二九二番歌)の四首からなるものである。それは低迷しがちである家持の詠作が、春の胎動と共に、作者自身の内部から詠作せしめたと言わなければならない。結果的に、卷十九の巻頭の春の歌群と照応することとなったのである。

【注】

- (1) 平成二十四年度「美夫君志会全国大会 要旨・資料」(美夫君志会、二〇二二年六月三〇日)。
- (2) 小野寛氏「春愁絶唱三首の読みの現在(初発「国文学解釈と鑑賞」一九九七年八月「万葉集 読みの現存 大伴家持」同氏「万葉集歌人摘草」改題所収、若草書房、一九九九年二月)。
- (3) 北山茂夫氏「大伴家持」(平凡社、一九七二年九月)二三八頁。
- (4) 市瀬雅之氏「天平勝宝五年の家持―春愁の歌三首への到達―」(中京大学「文学部紀要」三〇巻二号、一九九五年一月、同氏「大伴家持論―文学と氏族伝統―」おっふう、一九九七年五月、改題所収)。
- (5) 川口常孝氏「大伴家持」第四章第三節「春日遅遅」(桜楓社、一九七六年一月)八七四〜五頁。
- (6) 川口常孝氏「越中以後―生涯―非即物主義的文学への道―」(中西進氏編『大伴家持 人と作品』桜楓社、一九八五年一〇月)。
- (7) 内田正男氏「日本暦日原典」雄山閣出版、一九七五年七月。[第四版]一九九二年六月。
- (8) 中西進氏「大伴家持・6、もののふ残照」(角川書店、一九九五年三月)八〇頁。
- (9) 北山茂夫氏「大伴家持」、注3に同じ。二三六〜七頁。
- (10) 引用する小野寛氏と藤井貞和氏以外の代表的文献を記しておく。山本健吉氏「大伴家持」日本詩人選5(筑摩書房、一九七七年七月)。橋本達雄氏「興の展開―家持の依興歌二首の背景―」(関西大学「国文学」五二号(吉永登先生古稀記念上代文学特集、一九七五年九月、同氏「大伴家持作品論攷」所収。辰巳正明氏「依興歌論」(『東洋研究』六二二六四台併号、一九八二年二月、同氏「万葉集と中国文学」所収。橋本達雄氏「家持の憂愁」(『国語と国文学』一九八二年一月、同氏「大伴家持作品論攷」「悽惻の意」と改題所収。小野寛氏「大伴家持の依興歌追攷」(『論集上代文学』一三冊、一九八四年三月)。
- (11) 小野寛氏「家持の依興歌」(『論集上代文学』第四冊、一九七三年二月、同氏「大伴家持研究」所収。要約引用は、注2の小野寛氏「万葉集歌人摘草」の四五〇頁による。

- (12) 藤井貞和氏「作家論 詩人の成立」、『古代文学』三〇号、一九九一年三月。同氏「詩の分析と物語状分析」所収書、三五四頁。
- (13) 昭和十年（一九三五）九月の『萬葉集総釈』を掲げたが、橋本達雄氏は「空穂顕彰―家持秀歌の発見について―」（『まひる野』四二五号、一九八二年九月、同氏『大伴家持作品論攷』改題所収）において、「春愁三首」の最初の捉唱者は窪田空穂氏であることを指摘している。
- (14) 中西進氏「絶唱三首の誤り」（『成城万葉』一六号、一九七九年一月、同氏『万葉の時代と風土』角川選書、所収（角川書店、一九八〇年四月）。『中西進著作集』第三巻、所収。角川選書、九七―一〇〇頁。
- (15) 廣岡義隆「讃酒歌の構成について」（『三重大学教育学部研究紀要』第三四巻、一九八三年三月、この論の注七において言及している）。
- (16) 尾崎暢殃氏「春愁の歌の形成」（『國學院雜誌』一九七一年七月、同氏『大伴家持論攷』所収、二八二―三頁）。この尾崎論を「く単純な形にして…俯観」という言い方で、整理し発展展開している川口氏論によった。川口常孝氏『大伴家持』（前出、注5の本、八八三頁）。
- (17) 川口常孝氏の『大伴家持』。注16に同じく、八八四頁。
- (18) 川口常孝氏「独」の世界」（『帝京大学文学部紀要』三巻、一九七一年三月、同氏『萬葉歌人の美学と構造』所収。所収書、三五二頁）。
- (19) 伊藤益氏「非在の構図―『萬葉集』卷十九、四二九二の論―」（『日本人の知―日本的知の特性』北樹出版、一九九五年一〇月）。

〔ひろおか よしたか 本学元教員〕